

注目の電熱ウェアを実走テスト

廣瀬達也は 電熱ウェアに 何を感^じじたか？

寒いのなら暖めればいい。実に簡潔な答えとしてバイク用電熱ウェアが普及しつつある。その実力に興味がある方も多いただろう。昨年に続き、本誌でおなじみの“達人”廣瀬達也が実走テストで体温を実測、さらにメリットとデメリットを率直に報告してもらう。



防寒性能はまさに感動もの
ただし改善の余地もあり

余計なものが苦手で、何事もできるだけシンプルにしたいと思っている。例えばツーリングを始めたころはプラグにスベアのワイヤー類に……いろんなものを持って出かけていた。目的地の多くがめったに人やクルマと出会うこともない山の中だったこともあり、何かが起きても自分でなんとかするしかなかったし、トータル対応のスキルがなかったから、「とりあえずスベアパーツを持っていこう」となっていたわけだ。

しかし荷物が多いといろんな影響が出てくる。支度や積載が大変だったり、ライディングにしても大きくて重いものを載せていけば不自由だったりする。やがて要領がわかってくるとどんどん荷物が減っていった。いろんなことがうまくできるようになっていく。ような気になるのが嬉しかったのを覚えている。キャンブ然り人生然りだ。

閉話休憩

冬の寒さは根性で乗り切るしかないと思っていた。根性がなくなればファストフードの店や温かな飲み物が24時間すぐに出てくる自販機の前で休憩するしかなかった。どんなに分厚いグローブを履いても、どんなに防寒性に優れるブーツを履いていても、どんなに工夫を凝らして重ね着しても少しずつ奪われていく。暖かさ。奪回するには、全身を「暖かな空気の中」にしばらく置くしかなかった。それが冬のツーリングの宿命だった。

電熱ウェアの存在は知っていた。しかし目に見えない電気に関しては見事なほどにオンチである。さらに面倒臭がり屋で心配症なのだ。どんなに配線図を眺めても理解できなくて取り付けられなかったら……まわりに何も無い寒い場所です

実走テストに至るまでの準備はこのように行なわれた



●体にセットした温度計のセンサーは計10個+外気温。センサーはテープで固定しただけで、一番装着した回数が多かったグローブのセンサーだけは断線してしまったものの、ほかには大きなトラブルはなかったが……かなり取っ手かかった



●手元スイッチがあるし短時間のテストということもあり、バッテリーから直に配線し出した電源の配線はややいやい加減な取り付けだった。実際の使用時にはタイラップやビニールテープなどを使い確実に取り付けよう



●停車後、なるべく早く“寒さ”を一目瞭然に知るためにはどんな方法が一番かと悩んだ末がコレ。体の各部などにセンサーをセットした温度計を板に貼り付け背負ったのだ。パソコンを使って自動的にデータを収集する方法も候補に挙がったのだが、それができるほどのスキルのある関係者がいなかったためである。問題は止まるたびに集まる視線だけ……



■衣装協力

今回はイタリア製「クラン・ヒーティングウェア」をお借りしてテストを行なった。使用した製品は以下のとおりだ。ほぼフル装備状態で、合計の価格は7万6464円なり。

- ホットインナージャケット
価格：2万1384円
- ホットインナーパンツ
価格：1万7064円
- ツーリンググローブ
価格：1万5660円
- ライクラインナーソックス
価格：1万2420円
- レギュレーター
価格：4320円×2
- Yケーブル
価格：1296円

※ジャベックス ☎03-3773-7633



総額7万6464円。そのコストパフォーマンスはいかに？

バイクの楽しみ方、遊び方にもいろいろあって、だからそんなことを誰かに伝えたいと思うとき、なにより大事なことは主語だと思ふ。そして冬のバイク旅の主語が走り続けることやより暖かさに包まれた快適さなら電熱ウェアの存在は不可欠と言っても過言でないほどの魅力

を

目覚めたと言ってもいい。

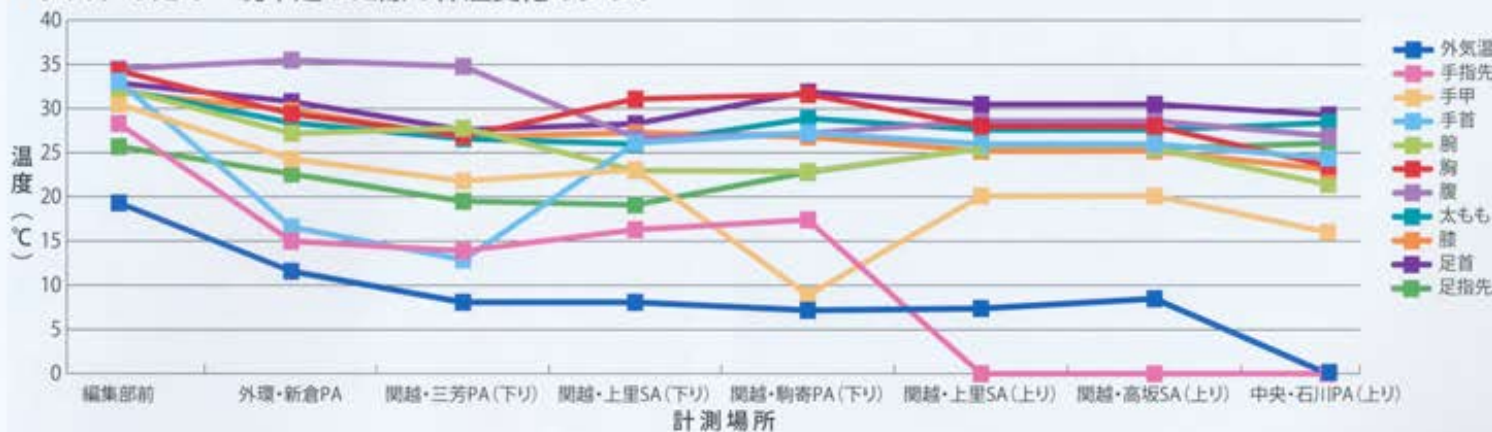
バイクの楽しみ方、遊び方にもいろいろあって、だからそんなことを誰かに伝えたいと思うとき、なにより大事なことは主語だと思ふ。そして冬のバイク旅の主語が走り続けることやより暖かさに包まれた快適さなら電熱ウェアの存在は不可欠と言っても過言でないほどの魅力

を

目覚めたと言ってもいい。



■ テストのため一晩中走った際の体温変化のグラフ



廣瀬達也
は電熱ウェアを
こう評価した

防寒効果が絶大である
ことは認めざるを得ない。
まったく寒くない

ただし、適切に温度調
整できないと「汗冷え」
で体調を損なうかも

バッテリーからの接続
方法に工夫が欲しい。
マグネット式とか

たっぶり味わわせてくれた。
しかしすべてが万歳というわけでは
ないのも事実だ。たとえばテスト時の帰路
で感じたことのひとつに「マヒ」があっ
た。寒さはやがて痛さなどになり、走行
を続けることが困難になるという症状と
なることが多い。ところが暖かさは「快
適とさえ錯覚させるのだ。つまりそのま
まの暖かさでいるうちに薄ら汗ばんでき
ても気づかなかつたのだ。

テストが終わったのは早朝の4時ごろ
だった。比較的暖かな日だったとはいえ
1日で一番外気温が下がる時、とくに
電熱線の周辺表面は30℃近いままだった。
それが原因かどうかは不明だが、コタツ
で寝てしまったときのようによいことに
「ダルい」と感じる時間があったのは事実。
電熱ウェアの魅力にハマってはみたも
の、それでも心配症だったり面倒臭が
り屋だったからその不安を電気に
詳しい友人に訊ねてみた。すると、「配線
をミスってれば最初から作動しないし、
出先でトラブルるのは配線ではなく取り付
け方が不十分だからだ」という。そうい
えば気をつけていても何度か中間コネク
ターを外し忘れたままバイクを降りて焦
ったことがある。テストということとい
い加減に取り付けていたからなのだが、
それでもコネクター部は破損することな
く外れてくれたのだから、これも確実に
取り付けておけばさほど心配すること
はないのかもしれないというのが感想だ。
まあそれでも「降りるときに気を付け
ればいい」といふ人間任せなことほど
当てにならないものはないのだから、も
っと簡単に脱着できるコネクターがあ
ればと思うのもまた事実だ。

さて今年の冬は久しぶりに真冬の北海
道へ走りに行こうかな！なんて気にさせ
た電熱ウェア。それはバイクライフにお
いて久々の衝撃的な出会いとなった。